赤羽茂乃氏講演会「絵本作家・赤羽末吉　―絵本でつなぐ日本と中国大陸―」

「異文化を学び自文化を学ぶ」プロジェクト　2022 年度第 6 回講演会　報告書

テーマ「絵本作家・赤羽末吉　―絵本でつなぐ日本と中国大陸―」

講師　赤羽茂乃氏

日時　2022 年 10 月 18 日（火）3 限 13:00～14:30

本講演会では、赤羽末吉研究の第一人者であり、絵本作家・赤羽末吉の義娘である赤羽茂乃氏に、赤羽末吉の生涯や赤羽末吉が手がけた日本と中国大陸の絵本作品、絵を描く際の工夫などについてお話いただきました。本講演会には、国際文化コミュニケーション学科の学生だけでなく、日本文学文化学科や教育学科、史学科、哲学科など他学科の学生や、教職員の方々にも参加していただきました。

赤羽茂乃氏は、絵本作家・赤羽末吉の生涯を辿りながら、幼いころに接するものがどんなに大切かについて、また、赤羽末吉が絵本の中に込めた思いについて、貴重なお話をしてくださいました。そして、赤羽末吉が人生の中で経験した出来事がどのように絵本の中に描かれているかを紹介しながら、貴重な写真や実際にスケッチしたダミーの絵とともに、赤羽作品の魅力や絵本を描く際にスケッチした風景を絵本の中に取り入れて描いている工夫について語ってくださいました。

（幼少期：絵本作家の資質を大きく育てる）

赤羽は、9 歳から下町・深川で暮らし、幼少期から大人の世界を垣間見つつ、絵本作家の資質を大きく育てていきました。芸者や舞妓の多い地域で、舞妓の絵を描いて遊び、着物に使用される日本の伝統的な色使いを幼い頃から習得しました。そのため、伝統を重んじつつも自由で伸びやかな気風の町で、柔軟な考え方に、自由さと深さを持って成長したのです。また、幼少期から大人びていて、人の心を読むことができる繊細な子どもでした。大人になかなか相談する機会もなかったため、何でも一人で考え、行動していた経験から、じっくり深く掘り下げて考える性格が培われたのです。

（幼少期に夢中になったこと）

赤羽が幼少期に夢中になったこととして、演劇や立絵、落語や文学が挙げられます。その中でも、赤羽が特に興味を惹かれたのは、「立絵」の「西遊記」でした。赤羽は後に、『西遊記』の絵本の挿絵も制作していますが、登場人物の表情は生き生きとして描かれています。また、中国の民話『王さまと九人のきょうだい』（訳：君島久子　絵：赤羽末吉　岩波書店,1969）に登場する「きってくれ」や「さむがりや」が受ける出来事と『西遊記』で繰り広げられる出来事が類似しているため、幼少期に「西遊記」に夢中になった影響が作品にも反映していると分かります。

幼い頃の豊かな感性に繋がる出来事が、絵本制作にあたって、洞察力や繊細さといった、感受性豊かな想像力を掻き立たせ、赤羽の描く絵は、さらに深みを増す絵となったのです。このように、幼少期に植え付けられた絵本作家としての資質は、絵本制作をする際に、物語の本質がどこにあるのかを読み解く大きな力となったことが分かりました。

（絵本制作のモットー）

赤羽は、絵本は子どものものであっても、できるだけ芸術性の高い絵を描こうとしました。「子どもたちにいい加減なことは描かない。うそは描かない。」というのが赤羽のモットーだったからです。

そのため、日本の絵本を描く際には、東北～沖縄の全国各地へ行ってスケッチをしたり、中国の絵本を描く際には、作品の舞台となる中国大陸の現地へ行って取材をしたり、スケッチに励みました。また、より多くの知識を得るために、研究書や関連の資料を読み、たとえ昔ばなしであっても、装束や道具、気候などを正確に描こうとしたのです。

中国苗族民話『あかりの花』（訳：君島久子　画：赤羽末吉　福音館書店,1985）を描くために、中国へ取材で訪問した際にも、実際に見てスケッチしなければならないものをリストアップしました。そして、現地で実物を見て、スケッチブックに描いていくのです。民話や昔話だからといって、現実的ではない絵を描くのではなく、時代や土地の風俗など

を物語の設定と合わせなければならないと考えていた赤羽は、取材を怠らず、スケッチしたいものが見つからなくて挫けそうになっても、諦めずに地元の方へ聞いてまわり、ようやく実際に使用しているものを見つけた時は、汗を垂らしながら一生懸命スケッチに取り組みました。

（誠心誠意を尽くした絵本制作）

赤羽は、1932 年から 1947 年の 15 年間、旧満州（現中国東北部）で生活しており、モンゴルにもスケッチをするために旅をしました。日本、中国、モンゴルで過ごした経験から、お互いに文化交流をする重要性を感じていた赤羽は、幼い子どもたちが、自身の国や文化を知るとともに、異なる国の文化も知ってほしいと願いました。そのため、赤羽自身が熟知していた中国・モンゴルを舞台にした絵本を数多く描いたのです。

また、「子どもたちは絵本を読みながら様々な体験をしていく。子どもは、大人が気がつかないような細かな描写もしっかりと読み取ってくれる」と語っていました。

特に昔話の中には残酷な場面が多く、近年の絵本では昔話をもっと穏やかに書き換えている作品も多くなっています。しかし赤羽は、決してストーリーを変えることなく、伝えられてきたストーリーを用いて、切り細工のように描いたり、絵に少しユーモアを持たせたりして、十分な配慮と工夫を重ねて表現したのです。

このように、絵本から読み取ることができる細かな描写の一つ一つを、子どもたちが理解する力を信じて、いい加減な絵ではなく、その絵本の本質的なものを表現することが、子どもたちの感性を豊かにする、という想いを強く持ち、絵本制作に誠心誠意を尽くして絵を描き続けたことを実感することができました。

（赤羽茂乃氏　プロフィール）

絵本画家・赤羽末吉の三男、研三と結婚。住まいを行き来しながら、義父である赤羽末吉の日々の暮らしに触れる。遺された原画やフィルム、スケッチなどの整理に携わりながら、絵本画家が辿った軌跡とその作品について調査を重ね、現在も各地で精力的に講演活動をおこなっている。　『絵本画家 赤羽末吉　スーホの草原にかける虹』　（福音館書店, 2020）　を著し、第 44 回日本児童文学学会特別賞、第 4 回日本絵本研究賞特別賞を受賞

ちひろ美術館・東京公式ホームページより引用（https://chihiro.jp/tokyo/events/08282/）

主催：文学部国際文化コミュニケーション学科　准教授　竹内美紀

報告：

文学研究科国際文化コミュニケーション専攻　博士前期課程 1 年　池田奈央・吉本若菜